

# 現代における定時制高校の役割（Ⅱ）

## —学校文化をめぐるせめぎあい—

○太田美幸（鳥取大学） 柿内真紀（鳥取大学） 大谷直史（鳥取大学）

### 1. 本研究の目的

本研究の課題は、現代の定時制高校がおかれている状況、抱えている問題群、そこからの転換の可能性を明らかにすることにある。

教育の機会均等の理念のもと、勤労青少年に後期中等教育を受ける機会を保障すべく発足した定時制高校は、1960年代以降その変質について多く語られるようになった。それはまず普通教育偏重批判とともに語られ、60年代には全日制の「亜流」という位置づけがなされるようになった。片岡栄美は、1965年以降定時制高校生徒が「学力は高いが経済的余裕の少ない家庭出身者」から、「経済的に余裕はあるが学力が低い者」あるいは「経済的余裕もあまりなく、学力も低い者」が多数を占めるようになってきたと分析し、その過程で全日制高校の「亜流」となり、社会的上昇の可能性を断たれた者のための場に固定されたことを指摘した（片岡 1983）。これはまた定時制高校の「終焉」として語られてもいる（今井 1995）。

こうした分析は、高度成長期以後の定時制高校の変容過程についての重要な指摘であるが、今日の定時制高校をめぐる状況を分析しようとするには、新たな枠組みが必要であると思われる。その際には、1) 定時制高校進学者の質的多様化、2) 後期中等教育における定時制高校の位置づけ、3) 高等学校再編計画における定時制高校の改革動向、さらに、4) 比率を高めてきた通信制課程やサポート校の位置づけなどの検討が欠かせない。

本研究（2007～2009年度科学研究費補助金「地域社会の変容下における定時制高等学校の危機と対応」代表者：高口明久・柿内真紀）では、このような状況下で多様化する定時制高校の姿を明らかにし、従来学力によって一元的に分化していた高等学校の配置の変容を明らかにすることを目的としている。

### 2. 本発表の課題設定

定時制高校への進学が必ずしも経済的な余裕のなさや低学力によるものだけでなく、不登校経験者、全日制高校中退者、外国人生徒、非行経験者、発達障害など「多様なバックグラウンド」を持つ生徒が定時制高校に集まっていることは、とりわけ1990年代以降、周知のこととなっている。都市部では「チャ

レンジスクール」「エンカレッジスクール」（東京都）、「クリエイティブスクール」（大阪府）など新しい名称をもつ学校が創設され、定時制課程の枠組みの中で「これまでの教育の中では自己の能力や適性を十分に活かしきれなかった生徒」（東京都）等を対象とした学校づくりが進行しているし、地方においても、「より個性を尊重する」「多様なニーズに対応する」「再チャレンジを可能にする」ことを目指した定時制高校の統廃合や学科再編が目立っており、制度の上でも生徒の質的多様性への対応が進められている。かつて定時制高校に付与された「勤労青少年に教育機会を提供する」「低所得者層に教育機会を提供する」「成人にリカレント教育の機会を提供する」という役割は、すっかり後景に退いているのが現状である。

本発表では、さまざまな理由で全日制高校に進学できない者が集まる定時制高校の現代的役割を、周縁化型競争（中西 1987、周辺化をめぐる競争：高口 1993）での生き残りをかけた「規格化」（フーコー）として読み解いてみたい。その際、周辺化をめぐる競争の一側面としての「学校文化をめぐるせめぎあい」に着目する。

### 3. 周辺化をめぐる競争の舞台としての定時制高校

高口明久はかつて「大多数の国民の子ども・青年を巻き込むこの学歴取得競争とその激しさを、下から、周辺から支えている第二の競争場面—周辺化をめぐる競争—の存在」に着目し、「競争の二重構造」を指摘した（高口 1993）。「受験ランク最底辺校」の志願倍率が異常に高いといった現象、あるいは「大量の中途退学現象や定時制・通信制課程からの落ちこぼれ」などを、「学校からの疎外・排除」をめぐる裏返しの競争過程の存在を示すものと捉えたのである。

高口が目にしたのは、数パーセントの高校不進学者、数万人の高校中退者の存在であり、「これらマイノリティー化した、低学歴を生きる者の存在そのもの、そして彼らがくぐり抜ける自立への困難な道程そのものが、先のような学歴取得競争の激しさを、そしてそれから逃れることが事実上許されてないかのような社会的拘束性を、根本的に下から支えるものとなっている」こと、そのなかには「貧困家庭や崩壊家庭、あるいは不登校・登校拒否、あるいは非行・問題行動、

そしてあるいは極端な低学力や心身の障害、こうしたさまざまな『問題』を色濃くかかえた一群の子どもや青年が含まれている」ことであった。そして、学校をめぐるこうした上と下との競争の二重構造の存立とその再生産について考察しつつ、児童養護施設出身者や障害児の高校進学状況に関する研究に取り組んだのだが、本研究は、高口のこうした問題意識をふまえて現代定時制高校の役割について考察するものである。

高度成長期以後、定時制高校の役割が大きく変容してきたことについては、先述のとおり既に有効な分析がなされているが、90年代以後の変容についての研究はいまだ十分には行われていない。そこで、まずこの時期の学校的日常の「くずれ」(乾彰夫)について押さえたうえで、90年代以降の変容を読み解くための枠組みを提示したいと思う。

長谷川裕は、学校の規律・訓練機能について論じる中で、くずれ現象を二つの側面から説明している(長谷川 1993)。第一の側面は、学歴獲得競争の激化が、競争から敗れそこから早々に離脱していく者を大量に生み出したことである。外部労働市場の下層部が拡大したことにより、離脱者には不安定であるものの労働機会が提供されるようになり、それが競争からの離脱を後押しする。企業社会との連結に支えられてきた規律・訓練装置としての学校の機能は、学校に将来の生活保障を求めるところからオリてしまった生徒たちにとってはほとんど意味をなさない。こうした説明は、普通科「底辺」高校にくずれが顕著であることもかみあっている。第二の側面は、消費文化の進展の中で自己への感覚を鋭敏にした青年たちの感性が、規律・訓練的な学校秩序に対して鋭くズレをきたすようになったことである。学校の規律・訓練装置の規格化作用は拒絶され嫌悪の対象になるが、それを完全に拒否しそこから離脱してしまえば、社会の規格から外れ、自己を承認してくれる他者の視界から消えることになってしまう。青年たちの多くは、内面では学校秩序を忌避しつつもそこにとどまるほかなく、そうした憂鬱と倦怠が学校的日常の実質的なくずれを生じさせている。

たとえ学校的日常に耐え難さを感じていても、そこからの離脱は、社会から求められる規格化をなしえないこと、つまり完全に周辺化されることを意味する。それを免れるために、ひとまずは「高卒資格」獲得によって規格化を果たすことが目指される。かくして、学校的日常(全日制高校)から何らかの理由で離脱した(しそうなった)者は、学校的日常の構成要素である学力獲得競争と学校秩序が相対的に緩いとみなされる定時制・通信制に集まることになる。定時制

高校の教師は、生徒が馴染みやすい空間づくりに腐心し、自尊心を低下させようとしている生徒を高卒資格を目指させることによって鼓舞するとともに、学級集団において仲間との共感関係を形成させ、なんとか卒業まで導こうと努力している。

#### 4. 定時制高校と学校文化

とはいえ、定時制・通信制高校も学校制度の一部であり、学校組織の制度文化から完全に自由ではない。学校(教師)は生徒を規格化して社会に送り出すという課題を負っている。定時制高校が通信制やサポート校と異なっているのは、「学校らしくない」ことを特徴としながらも、時間・空間・集団・社会関係といった学校生活の秩序を大幅に崩すことなく保持している点にある。だがその中でも、教師が内面化している文化は生徒の生活や労働のリアリティを前にして揺らがざるを得ず、様々な実践知が生み出され蓄積されていく。一方、生徒もまた様々なやり方で自らの自律的な領域を確保しようとする。学校生活秩序からの逸脱のラインをめぐるこうしたせめぎあいの中で、定時制独自の学校文化が形成されるといってよい。そのダイナミズムの中で教師も生徒も変容し、このことが、定時制高校教師の実践記録や元定時制高校生の回顧録によくみられるように、定時制独自の「豊かさ」として当事者に深く印象付けられるのである。

現代の定時制高校は、正統的な後期中等教育機関である全日制高校から排除された若者を社会に包摂する役割を担っているといえる。他方、生徒たちは、自分の置かれた社会的位置についての心理的葛藤を、学校文化に対する多様なレジスタンスによって表出させる。発表当日は、こうした文化的抵抗がもつ意味について、2007年以降実施してきた調査の結果をふまえて考察する。

#### 参考文献

- 片岡栄美「戦後社会変動と定時制高校」関東学院大学文学部紀要第68号、1993年他  
今井博「定時制高校の研究(1)」『関西教育学会紀要』19号、1995年  
中西新太郎「権威的秩序の内面化と主体形成」藤田勇編『権威的秩序と国家』東京大学出版会、1987年  
高口明久「学校における競争と再生産」教育科学研究会『講座現代社会と教育 第3巻 学校』大月書店、1993年  
長谷川裕「学校の規律・訓練」教育科学研究会『講座現代社会と教育第3巻学校』大月書店、1993年  
遠藤宏美「“問題”としての学校文化——「サポート校」における「学校らしさ」をめぐるダイナミズム」日本教育社会学会第54回大会発表要旨収録、2002年